

# 宇宙人の胎内回帰用生体 家畜にされた姫騎士

……ルバイニル王国で奇妙な事件が始まったのは王国暦三二〇年四月のことであった。王国の北西部に位置するバシユル州にて、夜の空を音もなく浮遊する「光輝くオレンジ色の円盤」が相次いで目撃されたのだ。人によってはその中に「奇妙な服を着た人間が乗っていた」と証言し、人々は何か不吉なことが起こる前触れではないか、と不安を囁きあった。その予想は、ほどなくして的中することになる。

バシユル州で異常な殺人事件が起こりはじめたのは五月に入ってからであった。犠牲者は主に人里離れた山の中や森の奥で暮らす猟師や木こりで、五月の下旬までに合計三七名が常軌を逸した方法で殺害されているのが発見された。犠牲者はいずれも男性で、腹部を切開されており、その「中身」を全て取り除かれて持ち去られていた。また、いずれの事件も、発覚するまでに数日から十数日の時間がかかったにも関わらず、遺体はどれも腐乱しておらず、ウジ虫すら湧いていなかった。

事件が起こったと推定される夜、山や森の上空を浮遊する「光輝くオレンジ色の円盤」が目撃されているが、この異常な殺人事件との関連は不明とされた。

バシユル州に隣接するクルドラクマ州のカイラムという町で、五月下旬から行方不明になっていた少年五人が発見されたのは、六月に入ってからすぐのことであった。

五人の少年は川遊びに出かけて行方不明となっていたため、当初は川

で流されて溺れ死んだものと考えられ、葬儀まで済まされていたのだが、生きて見つかったとの報せを受け、最初、少年たちの親は涙を流して喜んだ。しかし、その喜びは、すぐに絶望へと転化することになる。

発見された時、五人の少年たちは衣服を身につけておらず、全裸姿だった。また、腹部には縦に大きな傷が線のように走っており、首筋や腕には赤黒く変色した穴が幾つも開いていた。そして五人の股間からは、男性生殖器と睾丸が失われており、まるで女性器のように縫合された痕が残されていた。

「い、いつたい、おまえたちに何があったんだ……？」

驚いた親たちは、必死になって少年たちに声をかけたが、その質問に対する返答はなく、少年たちは口から涎を垂らしながらヘラヘラと笑っているだけであった。

五人の少年たちは明らかに正気を失っていた。というよりも、人間として破綻した状態になっていた。彼らは言葉の一切忘れており、喜怒哀楽を表情で表現する他は、獣のように唸るだけで会話が成立せず、出された食事を手掴みで食べるように食い散らかし、夜になると奇声を発して走りまわり、まるで身体の中から何かをほじくり出そうとするかのように自傷行為を繰り返した。それを止めようとする親に対しては、噛みついたり、引っ掻いたりして激しく抵抗し、少年たちの家は日を追うごとに荒れ果てていった。

五人のその後の運命は悲惨のひと言に尽きる。修道施設に幽閉されたひとりがかもつとも幸運で、後の四人の少年は、現状に耐えかねた親や兄弟に殺されたり、凶荒の果てに頓死したり、見世物小屋に売られて過酷な虐待の末に死亡したりと哀れな末路を辿った。

修道施設に幽閉された少年は、数年後に正気を取り戻し、自分が行方不明になった時の記憶を断片的に語っている。その証言によると、少年

たちが川で遊んでいた時、突然、上空に「光輝くオレンジ色の円盤」が現れ、そこから放たれた光を浴びた直後、身体が宙へと舞い上がり、そして気がつくところの場所に居たのだという。身体が宙へと舞い上がった後の記憶に関しては、どんなに思い出そうとしても思い出せなかったため、結局は判らずじまいであった。ただし、彼の身に起こった出来事に関しては、後に世界中の人間が体験することになる。

話は戻り、六月中旬になると、「光輝くオレンジ色の円盤」はクルドラクマ州に隣接するファームミア州で目撃が相次ぐようになる。その直後から、ファームミア州では行方不明者が相次ぐのだが、その全てが若い女性であった。

行方不明となった女性たちは、その後、遺体となって発見されるのだが、発見された遺体はどれも膣穴が裂け拡がり、腹が内側から爆発した状態の無惨なモノばかりであった。そしてどの遺体も、この世のモノとは思えぬ恐怖の形相で硬直しており、それを見た人々は、彼女たちの身にいったいどれほど恐ろしい出来事が起こったのか想像して怯え震えた。

六月下旬になると「光輝くオレンジ色の円盤」の話題はまるで伝染病のようにルバイニル王国全土への広まりを見せ、恐怖と狂気を伴って真偽不明の噂話が蔓延することになる。その中には「円盤にさらわれた妊婦が狂って戻ってきて化け物の子を死産した」という話や「行方不明となっていた兵士一団が脳ミソを刳り貫かれた状態で発見された」というおぞましい内容の話まで含まれており、人々の不安は日を追うごとに増していった。

かくして「光輝くオレンジ色の円盤」の話題は、ルバイニル王国を震撼させることになったわけだが、七月中旬になってそれよりも遙かに衝撃的な話題がルバイニル王国に襲いかかってきた。

七月一三日、友好関係にあった隣国のズオーダ王国が、突如として宣戦を布告し、二〇万の大軍で攻めてきたのである。完全に不意を突かれたルバイニル王国は、東部の主要都市バラサを落され、ズオーダ王国と国境を接するアルダヤ州とクラインベルカ州を失った。

むろん、ルバイニル王国も一方的にやられてばかりではない。すぐに兵を集め、軍を編成すると、名将として名高いゼルガリア将軍に指揮を託し、ズオーダ軍を撃退すべく、反撃に討って出た。この軍の中に、王の末娘で「姫騎士」の異名で知られるアリア・フォンデ・ルバイニルの姿も含まれていた。

ズオーダ軍との戦いでアリアの活躍は目覚しかった。彼女は常に陣頭に立って指揮をとり、先陣を切って敵陣に切り込むと、剣を振るって敵兵を右に左に斬り倒した。ファタの戦いではズオーダ軍の猛将タルハーンを一騎打ちの末に打ち倒し、続くレダ会戦では敵陣への突破口を切り開く原動力となった。その奮戦ぶりと彼女の容姿の美しさが相まって、ルバイニル軍の士気は高まり、ズオーダ軍は押しに圧されて各地で敗北を余儀なくされた。

そして八月二五日、この戦争の命運を賭け、ルバイニル軍とズオーダ軍がガラシヤ平原に集結した。後の世に伝わる「ガラシヤ平原の戦い」は正午に幕を開け、両軍合わせて三〇万が激突した。この戦いでも、アリアは先頭に立って突撃し、ズオーダ兵を「両手足の指の数では足りぬほど」斬り倒した。戦いは終始ルバイニル軍の優勢で進み、ズオーダ軍は押しに押され、夕方には後退が撤退へと変貌を遂げ、夜には壊乱状態となって戦場から逃げだした。戦いはルバイニル軍の勝利であった。

しかし、勝者となったルバイニル軍では、勝利を喜ぶ声よりも先に、戸惑いと驚きの声の大半を占めていた。戦いの最中、アリアが行方不明となったのだ。戦死か、それともズオーダ軍に捕まったのか、様々な

情報が錯綜する中、幾つかの目撃証言が総指揮官ゼルガリアの元へ届けられた。

曰く、

「突然、空にオレンジ色に光輝く円盤が現れて、不思議な力でアリア様を連れ去った」

というものであった。

……これ以降、アリアの姿を見た者はいない。

……続きは本編にてお楽しみください。